



よしや わざくれ 定価四五〇円

昭和三十五年十一月七日発行

著者 久保田 万太郎

発行者 岡 本 経 一

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 有限会社関川製本所

本文紙 三菱製紙株式会社

表布 山 川 商 店

製函 日の出紙器有限公司

東京都千代田区西神田二ノ二三

有限 青 蛙 房
会社

振替東京七二三八四
電話東京(三三二)四七六七

い
い
わ
い
ふ

久保田万太郎小品集
青蛙房刊

よしや

わざくれ

目次

回想四五

鷗外よりも

八

「町」の子供たち

六

柳の芽

七

明治四十二年

四

二十三のとき書いた戯曲

五

淵は瀬に

三

よしや わざくれ

二

ある日あるいはあるとき

なみうちぎわ

一四

かまくら雑記 (1)

一三四

かまくら雑記 (2)

一三四

雑談抄

一六九

旅行けば

オスロ

二四三

にわかへんろ記

二六九

日本海の波

三〇六

真孤の中

三三五

あとがき

三三二

回想四五

鷗外よりも

一

——このごろ、ときどき、おもいもよらないことを人にいわれ、つまらないことでも、ひどくそれに感心するくせがついてね。……自分でも、ちっと、おかしいと思うんだが……

——たとえば？……

——たとえば、二三日まえの晩だ、千尋博士の還暦の祝いの会が上野の精養軒にあった。……行くと、もう、ひかえ室は一ぱいの人で、どこをみても、向いて、も、知った顔ばかり。……なかには、相見ざること、十年、二十年という泪ぐましいのさえて来た。……ということは、あたまを下げに、わざわざ早く行ったようなものだったが、ひそかにそれを、そのひかえ室

でみていたある青年に、

“あなたほどのお年におなりだと、一たい、どの位、知人をおもちになるものでしょう？……”

と、あとで、まじめなかおで聞かれた。

“さア……”

と、おれは、おもわずいった。

と、

“千人位でしょうか？”

と、相手は、すぐまた、そのままの表情でいった。

“千人？……”

そういわれて、おれは、おもわず今度は、首を傾けた。

そして

“そうですナ、さア……”

——と、いったんですか？……

——いった。

——例口じゃアないナ、あんまり……

——だって、お前、だしぬけに、しかも、そんな思いもよらないことをいわれたら、だれだって狼狽する。……あわてるのがあたりまえだ……

——で、何んといいました、相手、そういったら？
——何んともいわなかった、それッきり。……先方^{せうほう}だつて、それ以上、いうこたアない……

——としても、敗^まけたことはたしかだナ。

——だれが？……おれが、だろう？……

——そうですよ。

——うん、敗けた。……完全に敗けた。……というものが、返事をした……のじゃアない、しようとしたのが、だ。……そもそものまちがいだったんだ、それが……

——返事のできるわけがないじゃアありませんか？

——そうなんだ。……なるほど、おれは、一たい、何人、知合をもっているだろう？……なぜ、いままで、それに気がつかなかったろう？……その晚しかし、すっかり考えてしまったよ、おれは、そのゆくりなき発見について……

——で、結果？……

——手がかりはついた。……死ねばいいんだという……

——死ねばいい？……

——告別式が計算してくれようじゃアないか、会葬者の数^{かず}を。……神のもたらした回答だよ、それが、おれにむかつての。……まるッきり縁のない奴^{やつ}の来る氣づかいはないからね、こればかりは。……しかし、それだとして、正確を期することはできない。……なぜなら、当日、天氣がよければふえるだろうし、雨がふれば減るだろうから……

——と、つまり、死んでもわからない、ということに……

——なるんだ。……しかも、それが、げんざい自分のことなんだよ。……自分のことが自分でわからない。……人間、生きることの難^{むづか}さの、こんなところにもかくれているかと思つたら怖^{おそ}くなった……

——なるほど、「あなた位の年になると」だナ。

——何が？

——そんなにも氣の弱くなるものか、と……

——そうじゃアない、氣が弱いんじゃアない……

——いいえ、そうですよ、たしかにその傾向ですよ。

……その証拠の一つとして、あなた、この間、銀座で、××新聞の安西君にお逢いになったでしょう？

——おぼえていない。

——でも、安西君、そういつていましたもの。……

そういつて、しかも、驚いていましたもの。……どうしたんだ、雪の下の大人、すっかり、このごろ、世なげちゃったじゃアないか？……

——どうして？

——あなた、安西君が、「どちらへ？」といつて帽子をとつたら、ともども、あなたも、一寸、買物に……」と、いと、いんぎんに、帽子をとつたというじやアありませんか？

——ああそうか、この間の、あの逢つた肥つた青年、安西君だったのか？……

——あれ？……と、そう思わなかつたんですか、あなた？……

——おもうにも思わないにも、いきなりあいさつされ、とッさに、ハテ、誰だつたろう？……たしかに知つてゐる顔……それも知りすぎるほど知つてゐる顔なんですが、どうしても名まえがでて来なかつた。……しかし、ていねいにさえて置けばまちがいはない。……そう思つて、さがが帽子を脱つたから、こっちも脱つた。

……安西君とわかつていたら、何も、そんなよいなことはしなかつた……

——さぎじゃア、そうとは知らないから、強情ガマンなあなたにしては不思議だ、どうした風のふきまわしかと、さッそく、ばくに報告して来たもんです。

——それで、君が、それは気が弱くなつたからだと結論したわけか？

——そうですよ。……しかし、安西君をわすれるのは酷いナ。……安西君は、あなた、いつか新橋のバーで……

——だから、わすれたんじやアない、名まえが、ただ、おもいだせなかつただけだ。……顔と名まえのバランスがとれなかつただけだ。

——ということは、忘れた、ということなんですよ。

——たとえ、ここに、フラスコがあるとするとね？

——フラスコ？……

——ガラスの徳利だよ。

——そりやア分つています。

——その中に水を入れるとするね。……入れすぎると溢れる。……その場合、フラスコがわるいか、溢れ

る水のほうがわるいか?……

——フラスコにしみはありませんよ。

——そうだろう?……問題じゃなからう、フラスコは?……つまり、だから、おれはフラスコ……口ッきり、もう、水の入っているフラスコだ。……それ以上、入れたって、水の溢れるのはあたりまえだ。……ということは、記憶にだって限界がある……

——と思ったって、安心はできませんよ。……溢れるのは、不必要な水とばかりはかぎりませんからね。

——そうなんだ、それでこまってるんだ、じつは、おれも……

——と、あなたは?……

——だって、むかしの記憶なら、たとえば、ある一人の附合つあひについてだって、いつ、どこで、どうして始めて逢ったか?……そのなりたちにしたって、すぐに、はッきり、おもいだすことができる。……ところが、近ごろの記憶になると、逆に、何もかも、うそのようにぼやけている。……それこそ、どこが目で、どこが鼻だかわからない。……そんなことってあるものじゃアないと思うんだが、ほんとだから仕方がない。

……となると、此奴こいつ、おれは、ヒツきよう、必要以上に生きすぎたんじゃアあるまいか?……というヒガミもでる……

——大丈夫ですよ、あなたって人は、みつけようと思えば、溢れたその水の中にだって自分をみつけれ人だから……

——それは、おれを、ほめることになるのか、貶けなすことになるのか?

——両方ですね。

——じゃア、こういう話はどうだ?……矢ッ張、銀座で、ある中年の夫婦の、仲よく、肩を並べてあるいて来るのに逢った。……不味まずいナ、と、思った。……というのが、その夫婦、一ト月ほどまえに一しよになったばかりで、まだ披露をしていないんだ。……勿論、その男もまえから知ってれば、女のほうもまえから知ってるんだが、と同時に、こまったことに、その女のまえの亭主も、おれはよく知ってるんだ。……何んとかして、だから、ぶつからない工夫は、と、ひそかに心をくいだいた。……が、生憎なことに、横町よこまちに縁ゆかりのない一本道げんみちで、どうにもならない。……と、女のほうが、

早くもおれをみつめて、ニコリとわらった。……それで、何か、おれはホッとしたような気がした……と思ったら、つぎの瞬間、今度は男のほうがおれに気がついたんだが、どうしたと思う、そのとき、その男たるや？……

——素直じゃアなかったでしょうね、このほうは？

……

——その通りだ。……たちまち狼狽^{あわ}て、たちまち顔面神経を硬^きばらせ、身をもつて女のまえに立ちふさがるとともに、長々^{ながなが}と、一別以来のあいさつをしだした。……途端に、女の顔から、わらいのかげの消えたことはいうまでもない……

——でしようとも……

——女にしたら、気易^{きやす}く、簡単に、〃家内です〃位なことを、その場合、いってもらえろと思つたにちがいないんだ。……それを、反対に、みせまじきものでもみせたように扱^{あつか}われたんだから、ことごとく驚いたろう。……だから、ただじゃアすまなかつたね、あれ？……たしかにあつたね、一ト悶着^{もんちやく}、あとで？……

——そうなると、いくじがありませんからね、男は

……

——うん、よく分る、君は……

——で、それで？……

——ごまかしちゃアいけない。

——ごまかしませんよ、大切^{たいせつ}なところだから……

——でも、それッきりだ、話は。そのまま、適当に、西とひがしにわかれた。……だから、その、あとあのいきさつでも、おれのただかんぐりにしかすぎなくて、大^{おお}きに、その二人は、何事もなく、あくまで仲よく肩を並べ、〃わるい奴^{やつ}に逢^あつたね〃位のことをいいながら、目のまえの、洋品屋、あるいは時計屋の飾^{ショウウィンドウ}り窓に、すぐにあるいは、かれらの注意をうつしたかも知れない……

——そのほうが、たしかだナ。

——そんなことはしかし、おれにとつちゃア、どうだっていいんだ。……それよりも、その突然の、かりそめの出逢いによって、おれは、すくなくも、その女との、その女のまえの亭主とおしての交渉……十年にあまる、長いつづかりの縁を、完全にたち切られた。……それによって、おれは、一つの過去を失つた……

—— 一たい、何なんです、そのまえの亭主というの
は？……

—— 役者だ。

—— 今度の亭主は？……

—— 建築家だ。

—— で、その役者とは？——

—— 死別しべつれた。

—— ああ、そうですか、それじゃア……

—— だから、それはいいんだ。……それについて
ア、もう、何んにもいさくさはないんだ。……ただ、
おれにすると、その女を、その今度の亭主が引合ひあわ
せてくれなかったばかりに、ヒョイト、そこに、へんな
木戸が立った。……ということは、ふたたび、おれは、
その女を、嘗てのその女として、もう、この目でみる
ことができなくなった。……これからは、どこまでも
建築家の細君としてだけ、あいさつもし、はなしもし
なくっちゃアならなくなつたんだ。……その女にして
も、二度と、もう、おれに、わらいかける場合をもた
ないだろう……

—— という……そういう意味なんですか、一つの過

去を失つたというのは……

—— そうなんだ。

—— そういう風にして、あなた、いままでに、どの
位の過去を失っているでしょう？

—— どの位の過去を？……

—— ええ。

—— どの位の過去……

—— わかりますよ、こりゃア、相手は人間じゃアな
いから。……おもいだしてみろんですね、一つ……

二

—— おれはいままでに、三度、火事に逢っている

……

—— 三度ですって？

—— 三十歳のとき、一度。……三十五歳のとき、一
度。……そして、五十七歳のとき、一度……

—— 五十七歳のときというのは、戦災でしょう？

—— そうだ。……そのまえの、三十五歳のときとい
うのは震災だ……

——大正十二年……

——さすがに知ってるナ。

——そのまえの三十歳のときは？……

——隣からでた火で焼けたんだ。……二月の末の、雪のふる明けがたで、目をさましたときには、もう、一めんの火……といたたいが、火じゃアなかった、煙だった。……おれは、二階の窓から屋根に出、屋根から往来へ飛び下りた……

——いまじゃア、とてもできませんね、そんな放れ業は？……

——できるさ、いまだって、その位。……いざとなりゃア……

——その代り、腰ぐらい抜かしますよ、きわめて容易に……

——いいえ、よく怪我をしなかったと思うよ、そのときでも。……けだし、雪のふっていたおかげだろうね。……カナリつもっていたからね……

——そんな風じゃア、何んにも持つて出られなかったでしょう？

——勿論さ、着のみのまま、万年筆一つだって、

もちだせなかった。……あかりが消えてしまったんだから、シヨチなしさ。

——シヨチなしと来ましたか？

——わらう奴があるか。

——わらやアしません。……でも……じゃアない、だったら、だ。……だったら、しかし、もツとシヨチなしだったでしょう。震災のときは？……

——どうして？

——だって、有名な十二階なんてものが倒れたりして、とくに被害がひどかったんでしょうから、浅草は？……

——ところが、その間にあつて、何んの危い目にもあわず、怖いおもいもしなかった。……というのが、浅草といつても、当時、おれの住んでいた新堀界隈は、不思議に、どこにも、火の手一つあがらず、きわめて平穩、ために方々から、……あるいは本所から、あるいは深川から、橋をわたって続々ヒナンして来た位のものだった。……しかし、夜になると、そのヒナンして来、電車通りに一ぱいタムロしていた連中が、だんだんまた理由のない不安に襲われ、より安全なところ

へと立退きはじめた。……それをみて、地元じもとの連中も、けだし、矢っ張、ひそかに心細くなったんだナ、大丈夫だ、ここは大丈夫だといいながらも、万一、女子供に怪我があつてはならないからと、ともども、その立退きの波にのつて……というよりも、その立退きの流れのすさまじい群にまきこまれて、といったほうが適切だ……とにかく、一応、だれも体からだだけ、すくなくも上野位までうつしたほうがいいという空気になった。

……仕方がない、おれもそれに従つた。……と、何んと、あくる日の朝になって、すなわち地震の襲来した二十余時間後になって、大丈夫のはずだったその地域が、おもいもよらない方角からのびて来た火の舌に、チョロリ、嘗められた……ということは、おれのそれを知つたのは、じつに、あく日の昼すぎだった……

——と、荷物も、それだと、大ていは？……

——でしたか、というのか？……でしたらう、というのか？……

——どっちだって同じおんなですよ。

——いいえ、違う。……でしたか、といえは……

——じゃア、出せたでしょう？……いいでしょう、

それなら？……

——ところが、鞆に入れてもつて出たこまこましたもの以外、何もかも、根こそぎ、きれいさっぱり焼いてしまった……

——まさか、しまつをししないで、荷物、あとへ残しッ放しにしたんじゃアないでしょうね？

——ということになるかも知れないナ、すべて、隣の家うへの藏の中に入れて、安心して引上げたんだから……

——何んだったんです、隣の家？……

——質屋はなだったんだ。

——質屋……とは、また……

——太だはな、だから、都合がよかった。……さきでも、近所づきあいはなのよしみで、さア、さアと、親切にあずかつてくれた……のはいい、無残や、その藏に火が入ったということは……

——焼けたんですか、その土藏？

——そうなんだ。

——ノンキなはなしだナ。

——ノンキじゃアないよ。